

考えているだろうが、これらの彼の律法解釈は、敵対者であったユダヤ人のアイデンティティを貶めるどころか、むしろ前向きに評価しているものだと言えるだろう。

『聖書選文集』の律法理解に関する解釈は矛盾するほど様々に混在している。このことは、古代のキリスト教における聖書解釈の豊かさを顕著に表しているものであり、教父の聖書解釈が単純なものではないことを示している。古代のキリスト教徒の著作家たちは様々な解釈方法を用いてユダヤ人を説得しようと試みていたのである。

アウグスティヌスの時間論に於ける過去と未来について

山田庄太郎

本発表は『告白』(四〇〇年頃)十一卷十四―二十八章で展開されるアウグスティヌス(三五四―四三〇年)の時間論に於いて、過去の時間と未来の時間の認識がどのようなものとして立てられているのかを論じるものである。

アウグスティヌスは『告白』に於いて、時間の計測の問題を主題化する。我々が計測し得るのは、存在しかつ何らかの広がりをもっているもののみである。然るに、過去と未来は存在せず、それ故にまた長く在ることも短く在ることも出来ない。従って我々が長い短いということの出来る時間は何処にあるのか、これが『告白』の論じる謎である。

一連の議論に於いて、彼は計測される時間を時間それ自体から、時間の内で生じる事物の運動の印象(affectio)へと読み替える。魂は事物の運動を認識する際に、自らの内にその印象を

刻み込む。然るに認識という行為は、認識を始め、続け、終わるという三つの相より成るのであるから、必然的に始点と終点とを有し、この「より先」と「より後」との間、持続することになる。かくして、魂の内の印象は、計測される為に必要な、存在と広がりという二つの条件を満たすことになるのである。

このようにして彼は、計測される時間を我々の内的な印象へと移行させる。しかし単に時間を内面化するのみでは、時間の計測という難問に対する十分な回答とはなり得ないように思われる。というのも過去の出来事を認識することが可能であるのに対し、未来の出来事を認識することは不可能であり、出来事(ens)の次元では過去と未来との間に明確な非対称性が存在しているからである。

この問題に答える為、本発表ではまず、過去の時間を計測する場合を基に『告白』の時間計測モデルを明確化し、その後、未来に対してこの時間計測モデルがどのように適用されるかについての考察を行った。

『告白』の時間計測モデルは、「腕の広がりによって横木の広がり我々が計測するように」「短い音節の広がりによって長い音節の広がり計測」(『告白』十一卷二六章三三)するといふものである。運動の認識と印象の形成とは、一対一の対応関係にあり、このことが計測されるものとしての印象に複数性を認める。然るに、これらの印象は任意の機会に記憶によって想起されることが出来る。それ故、複数の印象を比較考量することによって、我々は時間の長短についての言明を行うのである。

こうした時間計測モデルでは、確かに未来の時間それ自体は、その未来の出来事が認識され得ないという限りに於いて計測され得ない。そこでアウグスティヌスは、計測される未来の時間を、我々によって予測された未来の出来事の印象に求める。というのも我々は、「我々の未来の諸々の行為を予見」し、「その予見は」まさに我々の前に「現前するものである」(『告白』十一卷十八章二三)からである。『告白』はこのように予見がどのようにして為されるかについて、具体的な説明を与えていないが、我々はそれを、ほぼ同時期に執筆が開始された『三位一体論』(四〇〇―四二〇年頃)の内に見出すことが出来る。

『三位一体論』に従うならば、我々は過去の印象を基に、思考によって、未だ認識したことのない未来の出来事の印象、即ち想像物(phantasma)を得る。これによって我々は未来の時間をも計測することが可能となるのである。しかしこれら思考により形成された未来の印象は、過去の印象を素材として用いる限りで、記憶によって限界づけられており、いわば記憶の延長として在る。この意味で計測されるものとしての過去と未来は強い同質性を有しており、印象の次元では両者の非対称性は捨象されることになるのである。

再臨運動とホーリネス・リバイバル

黒川 知文

大正期再臨運動の直後にホーリネス・リバイバルが展開した。このリバイバルはどのような宗教運動であったのか、また

再臨運動とどのように関係していたのであろうか。

先行研究としては池上良正による宗教学的的研究(『近代日本の民衆キリスト教』東北大学出版会、二〇〇六年)とホーリネス教団による詳細な歴史的研究(『日本ホーリネス教団史第一巻』ホーリネス信仰の形成)ホーリネス教団、二〇一〇年)がある。本研究では、ホーリネス教会の雑誌で第一次史料である『聖潔之友』を中心に、『中田重治伝』(米田勇著、福音宣教会、一九七九年)や他教派の同時代雑誌も含めて史料として使用し、歴史学と宗教学(神学)の方法により分析する。

大正期リバイバル運動は、再臨運動が衰退・転換期におちいった直後に開始された。すなわち、それは、①開始期(一九一九年十一月)、②展開期(同年十二月―一九二〇年一月)、③最盛期(一九二〇年二月―八月)、衰退期(一九二一年九月以降)に時期区分できる。

このリバイバルの宗教運動としての性格は、第一に「語る人」と「聴いて活動する人」による説教運動であったこと、第二に再臨の前提としての聖化の体験を強調したこと、第三に宗教的恍惚状態をとまなう集合心性が見られること、が挙げられる。

リバイバルが展開した背景としては、第一に指導者である中田重治のカリスマ的指導があり、特に直前においてリバイバルを求める祈禱が指示されていたこと、第二に聖化論を中心とした聖書教育が徹底していたこと、第三にホーリネス教会の信徒の自由な信仰の証詞がなされていたこと、が挙げられる。

時代背景としては、日本は第一次世界大戦終結後の経済的繁